

H-2

トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性 *

江畑 冬生 (新潟大学)

1. はじめに

本発表ではサハ語とトゥバ語を音韻・形態・統語の面から対照し、両言語間の相違点に見られる一貫した傾向を指摘する¹。言語間の文法上の相違点としては、まず形態素自体の有無が挙げられる。例えば多くのチュルク諸語に存在する属格接辞は、サハ語では失われている。本発表が着目するのはこのような外面的に明らかな相違点ではなく、むしろ表面上は同じ文法形式を用いるがその用法において顕著な違いがある場合である。両言語を対照した結果、サハ語では音韻規則の規則性および文法標示の義務性が顕著であることが分かった。本発表中のデータは、特に断りの無い限り、筆者によるフィールドワークまたは筆者の作成したコーパス資料（新聞記事に基づく）からのものである。

2. 音韻の対照

本節では、サハ語とトゥバ語のいくつかの音韻的側面に関する対照を行う。両言語に適用される音韻規則を比べた結果、見かけ上は同様の規則が働いているようであっても、サハ語の規則の方が適用範囲が全面的ないし規則的であることが分かる。

2.1 接尾辞頭子音の交替

両言語において、接尾辞は一般に多数の異形態を有する。異形態の音形は、母音調和規則および接尾辞の頭子音の交替により決まる。接尾辞頭子音の交替は概ね調音方法の順行同化として捉えることができるもので、語幹末音素により予測可能である。例えばトゥバ語の複数接辞なら、母音に後続する環境では *börü-ler* (狼-PL) のように頭子音 /l/ で現れるが、無声子音に後続する時には *daš-tar* (石-PL) のように頭子音 /t/ に交替する。同様の有聲／無声の交替は、サハ語にも観察される。

しかしながら両言語の接尾辞頭子音の交替は、鼻音に後続する環境において大きく異なっている。この環境において、サハ語ではあらゆる接尾辞頭子音が例外なく鼻音に交替する(1)。一方トゥバ語では一部の接尾辞の頭子音のみが鼻音交替をするが、残りの多くの接尾辞は鼻音始まりの異形態を持たず単なる有聲子音が出現する(2)²。

* 本研究は、科学研究費若手研究(A)「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究：包括的記述と史的変遷の解明」(研究代表者：江畑冬生)および基盤研究(B)「北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究」(研究代表者：呉人徳司)の支援を受けたものである。本発表の内容は2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(2016年3月26日、京都大学)における発表内容に部分的に基づいている。

¹ サハ語とトゥバ語はチュルク諸語に属する。チュヴァシ語やハラジ語などの例外を除けば、チュルク諸語は分岐年代が比較的浅く、所属する諸言語は文法的均一性を示すとされる。Johanson (1998) によるチュルク諸語の下位分類では、サハ語およびトゥバ語は北東語群に含められている。Benzing (1959) の分類も、両言語を‘North Turkic’と呼ぶ点でこれに類するものである。一方で Menges (1959) や Poppe (1965) のように、他の北東グループ諸言語とは別に、サハ語・ドルガン語のみによる1つの下位語群を設ける考え方もある。

² 鼻音始まりの異形態を持つグループには、複数接辞、「～持ちの」を表す派生接辞、出名動詞派生接辞、否定接辞、同時副動詞接辞が含まれる。残りの接尾辞は鼻音始まりの異形態を持たないもので、与格接辞、処格接辞、奪格接辞、向格接辞、使役接辞、過去接辞、形動詞過去接辞、条件接辞等が含まれる。なお対格接辞 *-ni* や属格接辞 *-niŋ* も鼻音始まりの異形態を持つが、これらの場合には母音に後続する際にも頭子音が鼻音で現れる(つまり基底として鼻音を持つと見なせる)ため第3のタイプと見なせる。

- | | | | | | |
|-----|---------------------------|------------------------------|---------------------------|--------------------------------|--------|
| (1) | <i>miin-ner</i>
スープ-PL | <i>miin-neex</i>
スープ-PROP | <i>miin-ye</i>
スープ-DAT | <i>xon-nu-m</i>
泊まる-PST-1SG | [サハ語] |
| (2) | <i>mün-ner</i>
スープ-PL | <i>mün-nüg</i>
スープ-PROP | <i>mün-ge</i>
スープ-DAT | <i>xon-du-m</i>
泊まる-PST-1SG | [トゥバ語] |

さらに対照を進めると、トゥバ語の鼻音交替は接尾辞頭子音の調音位置により部分的に条件づけられていることが明らかになる。すなわち、サハ語では調音位置に関わらずすべての接尾辞が鼻音交替する。トゥバ語では両唇音始まりの接尾辞はすべて鼻音交替するが、歯茎音始まりのもの一部のみに鼻音交替を示し、軟口蓋音始まりの接尾辞には鼻音交替する接尾辞は無い。

2.2 語末強勢規則

チュルク諸語では一般に、語末音節に強勢が置かれる。両言語でも基本的には語末音節に強勢が置かれる。サハ語ではこの規則が徹底しており、語末以外に強勢が置かれることはまず無い³。

一方トゥバ語では、語末強勢規則に対する例外も見られる。第一に、動詞語幹に付加される否定接辞には必ず強勢が置かれる。従って否定接辞の後に別の接尾辞が付加しても、強勢が後方にずれることは無い⁴。第二に、名詞語幹に奪格接辞が付加される場合、奪格接辞の直前に強勢が来る⁵。両言語における強勢規則適用の違いは、以下の対照的な例により説明される。

- | | | | |
|-----|--------------------------------------|--|--------|
| (3) | <i>kel-lí-m</i> 「私は来た」
来る-PST-1SG | <i>kel-be-tí-m</i> 「私は来なかった」
来る-NEG-PST-1SG | [サハ語] |
| | <i>kel-dí-m</i> 「私は来た」
来る-PST-1SG | <i>kel-bé-di-m</i> 「私は来なかった」
来る-NEG-PST-1SG | [トゥバ語] |
| (4) | <i>itii-ttén</i> 「暑さから」
暑い-ABL | <i>kuorat-tán</i> 「町から」
町-ABL | [サハ語] |
| | <i>izíg-den</i> 「暑さから」
暑い-ABL | <i>xooráy-dan</i> 「町から」
町-ABL | [トゥバ語] |

2.3 母音調和規則の適用

サハ語・トゥバ語には母音調和が見られ、同一語中では前舌母音と後舌母音の共存を許さない。母音調和規則が働く結果、接尾辞中の母音は前舌母音または後舌母音を含む異形態を持つ。サハ語ではこの規則の適用が厳密であり、すべての接尾辞が(4)のように前舌母音／後舌母音の交替を示す。

ところがトゥバ語では、母音調和規則の影響を受けない接尾辞も存在する。例えば向格接辞 *-ze* は、語幹が前舌母音を含む場合にも後舌母音を含む場合にも母音 *e* を伴う（ここで接尾辞頭子音に関する交替は起こることに留意されたい）。これとは逆に同時副動詞接辞の 2 音節目は、常に後舌の長母音を伴って現れる。

³ ごくわずかな例外として、複合語を起源とするいくつかの語では語末以外に強勢が置かれることがある。ただし現代の話し言葉では、これらの語でもしばしば語末に強勢が置かれる。

⁴ 他のチュルク諸語においても、否定接辞が強勢の位置と関わることもある。ハカス語でも、否定接辞に必ず強勢が置かれる [Anderson (1998: 5)]。トルコ語・トルクメン語・タタール語では、否定接辞の直前の音節に強勢が置かれる [Lewis (2000: 21), Clark (1998: 45), Poppe (1968: 14)]。

⁵ なおトゥバ語では向格接辞 (*-ze* および *-diva*) にも強勢が置かれない (サハ語には対応する格が存在しない)。

- | | | |
|-----|------------------------------------|-------------------------------------|
| (5) | <i>erik-če</i> 「岸に」
岸-DIR | <i>baški-že</i> 「先生に」
先生-DIR |
| (6) | <i>kör-büšaan</i> 「見ながら」
見る-SML | <i>čun-mušaan</i> 「洗いながら」
洗う-SML |

3. 形態統語法の対照

本節では、サハ語とトゥバ語の形態統語面に関する対照を行う。両言語に同様に見られる文法特徴を比べた結果、サハ語では文法的要素が明示的に現れる傾向を示すこと、サハ語の形態統語法だけが義務性を示すケースがあることが分かる。

3.1 述語における 3PL 主語の人称・数の標示

両言語において、主語の人称・数を標示する接辞または接語が述語に付加される。サハ語では、主語が 3PL の時には述語への 3PL 標示が義務的である。トゥバ語では 3PL 主語の標示は任意である。

- | | | | | |
|-------------|-----------------------|-------------------------------------|--------------------------------|--------|
| (7) | <i>kiniler</i>
3PL | <i>kel-li-ler</i>
来る-PST-3PL | (* <i>kel-le</i>)
(来る-PST) | [サハ語] |
| 「彼らはもう来ている」 | | | | |
| (8) | <i>olar</i>
3PL | <i>kel-di-(ler)</i>
来る-PST-(3PL) | | [トゥバ語] |
| 「彼らはもう来ている」 | | | | |

3.2 着点を表す与格の省略

両言語において、移動動詞の着点は与格名詞句により表される。サハ語では着点を表す名詞句に対して、必ず与格接辞を付加しなくてはならない。一方トゥバ語では、与格接辞を付加せず、単にはだかの名詞句を用いることも可能である。

- | | | | |
|-------------------------|-------------------------------|---|--------|
| (9) | <i>čurapči-ga</i>
(地名)-DAT | <i>bar-biŋ-iŋ =duo</i>
行く-PST-2SG=Q | [サハ語] |
| 「あなたはチュラブチュに行きましたか？」 | | | |
| (10) | <i>bariŋ xemčik</i>
(地名) | <i>bar-gan =sen =be</i>
行く-PST=2SG=Q | [トゥバ語] |
| 「あなたはバルーン・ヘムチクに行きましたか？」 | | | |

3.3 「形容詞」の副詞句用法

両言語において「良い」「長い」「暖かい」など性質を表す語を品詞の観点からどのように位置づけるべきなのかは簡単な問題ではないが、本発表では仮にこれらを形容詞と呼ぶことにする。サハ語では、副詞派生接辞を付加することなしには、形容詞語幹を副詞句として用いることはできない。従って(11)の副詞派生接辞-*nik* を取り去ったならば非文となる。一方トゥバ語では、形容詞をそのままの形で副詞句としても用いることが可能である。言い換えれば、形容詞が明示的な語形成手段を取ることなく名詞句以外を修飾することが可能である。

- (11) *nuuččaliï* *türgen-nik* *üören-er* [サハ語]
 ロシア語で はい-ADV LZ 学ぶ-PRS:3SG
 「彼(女)はロシア語をたちまち身につける」

- (12) *aŋaa* *orus* *dil-ga* *dürgen* *öören-ip* *al-ir* [トゥバ語]
 3SG:DAT ロシア 語-DAT はい 学ぶ-CVB AUX-AOR:3
 「彼(女)はロシア語をたちまち身につけるであろう」

3.4 目的語への対格標示

両言語とも、目的語として現れる格として主格（格接辞なし）と対格（対格接辞付加）がある。以下で示す3つのケースにおいて、サハ語では対格接辞が必要とされるが、トゥバ語では対格接辞が現れないという違いが観察される（なお江畑 (2014) でも部分的にこの相違点に触れた）。

第一に、目的語が複数接辞を含むケースがある。サハ語ではこの場合に対格標示が必須であるので、(13)の対格接辞を取り去った場合には非文となる。一方トゥバ語では、(14)のように複数接辞に対格接辞が後続しない場合もある。

- (13) *kün* *aayï* *kinige-ler-i* *aak-a-buon* [サハ語]
 日 毎 本-PL-ACC 読む-PRS-1SG
 「私は毎日本を読む」

- (14) *naŋiral* *dugayında* *nom-nar* *nomču-du-m* [トゥバ語]
 平和 について 本-PL 読む-PST-1SG
 「私は平和についての本を読んだ」

二つ目は、目的語に1人称または2人称の所有接辞が付加されている場合である。先のケースと同様、サハ語ではこの場合に必ず対格接辞が付加される。一方トゥバ語では、目的語が主語の身体部位である場合など、対格接辞が付加されなくても良い場合がある。

- (15) (*min*) *ilii-bi-n* *suu-n-nu-m* [サハ語]
 1SG 手-POSS.1SG-ACC 洗う-REFL-PST-1SG
 「私は自分の手を洗った」

- (16) (*men*) *xol-um* *ču-p* *al-di-m* [トゥバ語]
 1SG 手-POSS.1SG 洗う-CVB AUX-PST-1SG
 「私は自分の手を洗った」

三つ目は、目的語に3SG所有接辞が含まれる場合である。チュルク諸語では一般に、所有接辞を用いて2つの名詞を関係づけた「XのY」という構造が1つの概念を表すことがある。サハ語から1例を示せば、*inax*「牛」と*et*「肉」から*inax et-e*「牛肉」が作られる（ここでは*-e*が3SG所有接辞である）。このような「XのY」構造が目的語となる場合、サハ語では義務的に対格接辞を付加しなくてはならない。一方トゥバ語では、同様の場合に対格接辞が付加されない。

- (17) *saxa-lar* *inax* *et-i-n* *siil-ler* [サハ語]
 サハ-PL 牛 肉-POSS.3SG-ACC 食べる:PRS-3PL
 「サハ人たちは牛肉を食べる」

- (18) *tīva-lar* *öškü* *e'd-i* *či-ir* [トゥバ語]
 トゥバ-PL ヤギ 肉-POSS.3SG 食べる-AOR:3
 「トゥバ人たちはヤギの肉を食べる」 [高島 (2008a: 57)]

つまり両言語の対格標示に関する規則は、次のようにまとめることができる。サハ語では目的語名詞句が複数接辞または所有接辞を含む場合には、対格標示が義務的である。この際には、主語との関係や名詞句の語用論的性質などの他の要因は一切考慮されない。一方でトゥバ語では、目的語名詞句が複数接辞や所有接辞を含んでいても、対格標示が現れない場合がある。

3.5 並列された名詞句に対する形態的標示

複数の名詞句が並列的に用いられる時、サハ語では名詞句それぞれに形態的標示を付与しなくてはならない。(19)のように、格接辞や所有接辞は並列された名詞句のそれぞれに付加される。

- (19) *saa-bi-n* *ikki* *xoŋor-bu-n* *süg-en* *tönn-öörü*
 銃-POSS.1SG-ACC 2つ ヒシクイ-POSS.1SG-ACC 担ぐ-CVB 戻る-CVB
 「私が銃と2羽のヒシクイを担いで戻ろうとして・・・」

一方トゥバ語では、いわゆる group marking が可能である。(20)では複数の目的語が現れているが、2つの目的語 *aŋ* 「獣」および *kuš* 「鳥」に対して後者にのみ対格標示がなされている。同様に(21)では、3つの名詞句に対して1つだけ 2SG 所有接辞が付加されている。

- (20) *ol* *iyaš-tar-ni =daa* *aŋ* *kuš-tu =daa* *uzutka-p* *ka-ap-kan*
 それ 木-PL-ACC =CLT 獣 鳥-ACC =CLT 滅ぼす-CVB AUX-PRF-PST:3
 「それ [山火事] は木々をも、獣や鳥をも一掃してしまった」 [高島 (2008b: 105)]
- (21) *šugum* *balaas* *kīdīraaž-īŋ* *sumka-ga* *četčele-p* *al*
 定規 消しゴム ノート-POSS.2SG カバン-DAT 満たす-CVB AUX:IMP.2SG
 「君の定規、消しゴム、ノートをカバンに入れなさい」 [高島 (2008a: 65)]

3.6 存在文における「存在」を表す語

存在文において、サハ語では(22)のように存在を表す名詞的語幹 *baar* 「いる／ある」を置かなければ非文になる。一方トゥバ語では、場所を表す名詞句に主語標示を後続させて文を終える⁶。

- (22) (*bihigi*) *manna* *baar-büt* [サハ語]
 1PL ここに いる-1PL
 「私たちはここにいる」
- (23) (*bis*) *mīnda =bis* [トゥバ語]
 1PL ここに =1PL
 「私たちはここにいる」

⁶ 不在を表す場合には両言語において *suox / čok* 「いない、ない」が必須となる。この事実と対比することで、(23)におけるトゥバ語の「場所＋主語標示」が「存在」を表す機能も兼ねていることが明確に理解される。

4. まとめ：サハ語とトゥバ語の相違点に見られる一貫した傾向

本発表では、同系のサハ語とトゥバ語を音韻面および形態統語面から対照した。その結果として、両言語の間には以下のような一貫した相違点が存在することを明らかにした。

- [1] 音韻において（接尾辞頭子音の鼻音化，語末強勢規則，母音調和規則），サハ語の規則は徹底的・全面的であるが，トゥバ語の規則には例外が含まれる。言い換えればサハ語では，規則の平準化 (leveling) が起こっている。
- [2] 形態・統語において，サハ語は文法要素が明示的・義務的に用いられる傾向を示す（3PL 主語の標示，着点の与格，副詞派生接辞，対格標示，並列名詞句，存在文述語）。これらのうち対格標示は規則の平準化とも言えるが，それでもなお文法要素を明示化する方向への平準化である。

同系の両言語は下位分類においても同一の北東グループに分類され，地理的分布も比較的に近い。Ebata (2016) では，これらの相違点の一部（3PL 標示，副詞派生接辞，並列名詞句）がサハ語とツングース諸語の接触によってもたらされた可能性があることを指摘した。Johanson (2006: 10) 等は，サハ語の基層言語がツングース諸語であると指摘する。Johanson (2002: 149-150) は，チュルク諸語の文法構造に見られる高度な規則性と単純性が「コイナー化」による平準化によるのだと述べる。サハ語に見られる規則性と義務性も，コイナー化に伴ってもたらされた可能性がある。

略号

ABL 奪格，ACC 対格，ADVLZ 副詞派生，AOR アオリスト，AUX 補助動詞，CLT 接語，CVB 副動詞，DAT 与格，DIR 向格，NEG 否定，PL 複数，POSS 所有接辞，PROP 所有(proprietary)，PRS 現在，PST 過去，Q 疑問，REFL 再帰，SG 単数，SML 同時副動詞

参考文献

- Anderson, Gregory David. (1998) *Xakas*. München: Lincom Europa.
- Benzing, Johannes. (1959) Classification of the Turkic languages. Jean Deny, et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta* I. 1-5. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 江畑 冬生 (2014) 「サハ語・トゥバ語・トルコ語の目的語格標示」『北方言語研究』4号, 33-42.
- Ebata, Fuyuki (2016) The linguistic status of Sakha: A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages. Fuyuki Ebata and Tokusu Kurebito (eds.) *Linguistic Typology of the North*. vol.4.
- Johanson, Lars. (1998) The history of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 30-66. London: Routledge.
- Johanson, Lars. (2002) *Structural factors in Turkic language contacts*. Richmond: Curzon.
- Johanson, Lars. (2006) Turkic language contacts in a typology of code interaction. Hendrik Boeschoten and Lars Johanson. (eds.) *Turkic languages in contact*. 4-26. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Lewis, Geoffrey. L. (2000) *Turkish grammar*. [2nd edition] Oxford: Oxford University Press.
- Menges, K.H. (1959) Classification of the Turkic languages. Jean Deny, et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta* I. 5-8. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Pope, Nicholas. (1968) *Tatar manual*. Bloomington: Indiana University Press.
- Pope, Nicholas. (1965) *Introduction to Altaic linguistics*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- 高島 尚生 (2008a) 『基礎トゥヴァ語文法』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 高島 尚生 (2008b) 『トゥヴァ語教本』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。